

## 12 けがれの思想の歴史的観察

杉田 暉道

老健施設「すこやか」

日本においてすでに古代に浄・不浄(けがれ)の思想が成立していたことは『古事記』、『祝詞』(ノリト)から明らかである。『古事記』では伊弉諾尊(イザナギノミコト)は亡くなった伊弉丹尊(イザナミノミコト)の蛆の湧いた死体を見た、めにけがれた身になるが、清めの儀式を行ったために日本の主要神が生まれたとある。天照大神は伊弉諾尊が左の眼を洗ったときに生まれ、月讀命(ツキヨミノミコト)は右の眼を洗ったときに生まれた。須佐之男命(スサノオノミコト)は伊弉諾命が鼻を洗ったときに生まれたと記している。これらから、古事記の世界観は三つの対立軸(浄・不浄(けがれ)Ⅱ生・死Ⅱ上・下)の形で繰り広げられていることが分かる。『祝詞』では神意を犯す行為や、神が忌み嫌う行為を罪とした。この罪は国津罪と天津

罪に分けられる。前者は人間の共同生活にとって忌むべき行為Ⅱけがれを指している。そして罪によってひき起こされた神の怒りをなだめるために祓(ハライ)と禊(ミソギ)が行われた。これが祭りの始まりである。

日本に伝来した仏教は、当然けがれの思想を中心としたヒンドゥウ教的色彩(ヒンドゥウ教の教理と生活の規範が記されている『マヌ法典』に述べられているけがれの思想を見ると、出産、性交、排泄行為、経血、死などの生命の再生産のために欠くことのできない重要な生の営みを、けがれの強力な源と考えた。そして身体の部位については、へそから上よりも、へそから下の方がけがれが濃厚であると考えた。したがって、身体の不浄物である脂肪、精液、血液、頭垢、大小便、鼻汁、耳垢、痰、涙、眼脂および汗を扱う医師、助産師、看護師、洗濯屋、理髪屋は賤業と見なされた。)を帯びていた。これが実際に行われたのが殺生禁断の詔勅である。最初の殺生禁断の詔勅は天武四年(六七六年)に出され、翌年には最初の放生(捕えられた生き

物を買集めて放してやる儀式)の勅が出されている。また死刑も中止した。朝廷でも死の穢れが身に降りかかるのを恐れていたことがわかる。平安期の後半期になると、戦争や疫病の蔓延がさらに激しくなり、人々の不安が一層広がっていった。仏教はこの時代の人々に合うように教えをやさしく説き、現世は穢土であることを強調し、仏教の教えを守らないものは、死後地獄に落ち、浄土に行けないと力説した。

かくしてけがれの思想は、わが国に広く定着していった。そして最も嫌われるのは死穢である。けがれの実態は日常の衛生習慣の中に容易に見出すことが出来る。その実例をあげると、われ／＼日本人は外から帰宅すると、玄関で靴をぬぎ、上り口でスリッパをはく。米国では靴をはいたまゝ、で家の中に入る。米国の学生は学校の教室の机の上に平気で靴を載せ、かつ同じ机で昼にサンドイッチを食べたりする。また日本では葬式から帰った者に塩をまいて清める。これができない場合は、葬式場で香典返しの一部として塩の包みを渡すところもある。

さいごに臓器移植との関係についてみると、死者の臓器を提供する場合、死者はもつともけがれたものと考えられるから、提供する側も提供される側もこれを望まないと思われる。よって提供を受けることがむづかしいと思われる。生存している人の臓器の提供を受けられる場合、提供者は――満足な体で死んで極楽に再生したいと願っているから一つでも臓器が欠損しているとその願望が果せないことになる。